

2003年 VVN第5回研修 「ベガルタ仙台・市民後援会のめざすもの」 報告書

日時 2003年3月2日(日) 10:30~12:00
場所 セルバ 5F セルバホール (仙台市泉区泉中央)
講師 ベガルタ仙台・市民後援会 理事長 佐々木知廣 氏
受講者 20名



【 ベガルタと一緒に生きる 】

おはようございます。市民後援会の理事長をやっております佐々木でございます。会長はご存知のとおりさとう宗幸が務めております。皆さんとの意見交換をしながら進めていきたいと思っております。スーツを着ているのは、なにも頼まれたからというわけではなくて(笑)、この後壮行会が勾当台公園でありまして、会長の代わりに挨拶をしなければならぬのです。失礼しますが、上着を脱いで立ったり座ったりしながら、自由にやらせていただきます。

私には高校1年になる双子の男の子がいるんですが、非常に羨ましいと思うんですね、それは、ベガルタができて8年、彼らは物心ついた辺りから、ベガルタと一緒に生きてきています。これから先、ベガルタが100年続きます、生まれてから死ぬまで、ベガルタと一生つき合う事が出来るんですね。私の場合は、38歳位の時に、初めてブランメルが誕生しました。そこからしか付き合いがないんですよ。多感な青春時代、今のコアなサポーター連中は20歳代が中心ですよ、彼らみたいにはじめて飛べる時代になかったわけで、なんと残念なことかと、やり直したいと思うんですが、やり直せないのが、今のうちの子どもたちを見てると、うれしいなぁと思っています。皆さんも自分にとってどんな年だったかは、ブランメル・ベガルタ絡みで記憶しているはずなんですね。世の中がどうなったのかを一度対比してみると、おもしろいんじゃないかと思えます。が、残念なことにこの子どもたちは親に反抗的態度をとるんです。一人は浦和レッズのものすごいサポーター(大爆笑)。もう一人は、東京ヴェルディのサポーターで、アウェーの試合に行くといつも親子がバラバラになってしまうんですね。最近浦和のホームページで、マッチデープログラムを作っている方が、カントリーロードの裏話の暴露を書いてありましたが、その話と言うのがうちのことなんですね、昔まだ後援会もなかった頃、浦和・駒場に行きまして、駒場って所は、子ども一人にすると危ないですよ、それで何とかしようとフロントと連絡取り合って、向こうのサポーターに預かってもらったわけなんです。子どもは向こうのゴール裏ではじめてきて、こっちはこっちで、300人くらいしか入らない隔離席で騒いで、ということでした。その時に初めて浦和の方々と縁ができたんです。その時の家族の親父が、後援会の理事長やってる、なんて暴露されたんです。

【 後援会の発足について 】

後援会について、少し細かい話をします。95年から始まって、チームの予算、最初の頃は、4.5億くらいしかなかったんです。出て行くのは13.4億。2年間で10数億の赤字をためちゃったんですね。97年の途中で仙台スタジアムが出来て、大喜びした翌々月あたりに、ブランメル14億の累積赤字・経営破たんと新聞に書かれた。仙スタが出来て、98年開幕戦、どの位観客が入ったか覚えてますか？3600人、前の年の平均が4854人、こりゃ大変だと思いましたが、大リストラした後で、当然意気消沈してますが、開幕戦は行くぞということになりそうなもんだが、前の年の10パーセント減ということになる。なんとかこのスタジアムを盛り上げなければ、と思いました。

ブランメルメーリングリストという老舗のMLを針生さんが作っていて、97年の暮れあたりから、仙波さんという人が、ピブスを作って配布したい、スタジアムを緑に染めたいということになりました。リーグ戦2試合とナビスコカップの1試合合わせて3試合で、1万人に配ることになりました。それから300万円かかるためスポンサー探し、郵政局の担当者に引き合わせて実現しました。98年5月にこの企画があって、それまでスタジアムでは見ず知らずの人たちが、一つにまとまってなにかしようということになりました。この他にもキルトプロジェクト、30センチ四方の緑の布をつなげて、大きなユニフォーム型にして、アウェー側のコーナーに飾ったりした。当時のどかで、あんなことやっても誰も文句言わなかった。当初はスタジアムが淋しかったですね、「いらっしやいませ」の声があるわけでない、グッズ売り場がどこかもわからない、座っていても隣に誰もいない、風が吹いてくると寒い、という有様。なんとか、にぎやかし、にぎやかにしたかった。今でも後援会カウンターでは、大声をあげて呼びかけていますが、それを聞くとワクワク感を感じることができる。

6月にナビスコで浦和と戦う機会があった。ブランメルはJリーグ準会員だったので、それができたんですね。浦和と戦うんで駒場に応援に行くために、30人位でしたが、初めてバスを仕立てて行ったんです。浦和市内に入っていくと、軒先にまっかっかな旗が下がっている。すごいなぁと思っていると駒場近くなってきて、自転車にリュ

ック背負って、後ろに子どもを乗せて、その子がLフラッグ握り締めて旗をなびかせてスタジアムに向かっている。それが一人や二人ではない。すごい町なんだ、こんなチームと試合するんだ、と衝撃的だった。鳥肌が立ちました。バスに乗っていたみんなが、そんな印象を持ったようでした。そういう体験と、何とかしなくちゃ、というのが合わさって、いろいろ勉強しているうちに組織立ったものを目指すようになった。当時、20歳代後半から30歳代にかけてのフロントが、一緒に勉強会に入ってくれた。こっちはわからないから絵物語をすると、それは無理だとか、こういう対応があるよだとか、いろんな話をしてくれて、最初はイベントの企画だけやるようなグループだったのが、観客を2万人にする、仙スタを満員にするような盛り上がり、「草の根のムーブメント」なんてかっこいいことと言ってましたが、そのためには、まずもって認知度をあげていくしかない。企画だけでなく、スタジアムの外も含めた全体的な話もだんだん出てきた。でも企業が相撲のようにタニマチ的に入ってきて、うちは30万だ、40万だというような分担して作る後援会ではなくて、個人から、子どもでもおじいちゃんでもおばあちゃんでも、100円の会費を出せば会員になれる、2万人に会員のバッジをつけてもらいたい、100万人都市だから単純に考えて、50人に一人が後援会のバッジをつけてくれる計算になるとすると、そしたら世の中変わるかもしれない、そっちを目指すそうよ、ということで、後援会が始まったのです。

この間、西牧さんにいい話を聞きました。ホットボイスという企画で、スタジアム北口に来た人に応援メッセージをもらって、キックオフ前にスーパービジョンに映し出すというものなのですが、あれ後援会で撮ってるとは知りませんでした、と言われて、なるほどと。PR不足もあるんでしょうが、後援会何やってんの、という声があることも意識しないといけない、ということですね。また、チームカラーがゴールド、黄金の稲穂という連想から、ゴールドの田んぼがあったらいいよね、ベガルタのVの字の田んぼがあってもいいよね、なんて話をしていたら、農家の方で私やってもいいよ、という人が現れて、田んぼつくってます。その名もべがる田ということで、看板が立ってます。最初の頃はこうした雑多なことをやってまして、何とか2万人入ってほしいということだけで、ポリシーというのは、はっきりいってしっかりとはありませんでした。なので、活動していく中で、Jリーグの100年構想とか耳にするようになり、いつの間にか、我々もJリーグの100年構想の役に立てたらいいい、という風になってきて、活動の方向性が決まってきたのです。

【 質疑応答 】

後援会の資金はどこから来ているのですか

会員証とバッジ代、会報で100円以上かかっています。実は運営委員組織図上では39名で運営していますが、運営委員になると、もれなく毎月1000円ずつ、金が出せる(笑)ということなんです。この1000円が事務経費で、イベントは独立採算でやっています。なので、わたしがビブスやりたい、となればスポンサー探してこなくちゃならないし、イヤフラッグとあって、毎年旗を100本作っていますが、原価で販売する。誤差は少しあっても、採算をとれる様にして、できないんなら基本的にやらない、というスタンスで来ている。クラブからお金どれくらいもらってるか、とよく言われるが、私の認識では1円たりとももらっていないと思っている。例えば、会議室を貸してほしい、といって無償で借りているのについて、それが寄付だといわれればそうかもしれませんが、ゲンナマという意味ではもらっていない。今の時代インターネットの力がなければ、後援会も成り立たなかったと思う。後援会運営委員は会議も持つが、毎日のメールでのやり取りの方が多し、銭をかけずにみなさんにお知らせするのに、ホームページがなければ、まず無理だったでしょうね。

ワンコインは魅力ですよ、後援会会員の100円、マッチデーの100円は値上げするべきではなく、会社と話し合っていて欲しいと思います。

マッチデーについては、これまで3つ折だったのを8ページ立て・オールカラーにしましたが、引き続き100円で売ることになりました。初めは赤字覚悟でやりましょう、ということだったが、それなりに黒字は出ているということですから。マッチデーはとても貢献していると思います。情報が得られるだけでなく、試合前の暇つぶしに使ってもらえて、チームの利益に貢献して、こんなにいいことはないですよ。アウェーのサポーターが買って

きますね、おみやげに丁度いいんですね。また今年からカーサ・ベガルタでバックナンバーを売るということで、売り切れで買えない人、チケットがなくて入れなかった人のために、別売りをすることにしました。100円だして、100円のクーポンが何枚かついてくる、ということも始めるので、去年以上に売り上げることができるだろうと思う。

会社との打ち合わせは

毎月1回定例会を持っている。専務・統括・広報と後援会部長以上、それが生命線。

運営経費なんですが、成績と一緒になんですね。97年エルスナー時代11億5000万、大分は毎年10億で上がる計画を立てていたそうです。98年5億9000万、99年約5億弱、2000年7億、01年7億2000万、02年13億でスタート、03年は20億弱くらいですね。すごい上がり方です。万が一J2に降格したら減らすのは難しいですよ、後援会としてはフリーゲルスのことが頭にあって、一番心配したのは、2002年にこのチームがなくなってしまうのではないかと、ということでした。ワールドカップの期間は会場を持つてる都市で、プロサッカーチームがないなんて、とメンツにかけて持つだろう、でも終わってしまったら、何だこのお荷物、なんでベガルタにだけ金出すんだ、という人も多いようです。だから、2002年になくなるかも、という強迫観念に駆られながら、後援会をやってきたという思いがあります。ところが、2001年で昇格を決め、2002年ワールドカップの年に、J1に上がるという、絵に書いた餅をやってくれたもんだから、ちょっとほっとしてはいますが、どうしようかな、というのが本音です。今年はいいとして、来年・再来年調子悪くなってきたら、どういう支え方をしていっていいか、ということ、これまではっきりと議論してきたわけではなかった。バックに京セラだとか持つてるチームは大丈夫でしょうが、それ以外のチームはどこも、ハラハラドキドキでシーズンを迎えるんじゃないでしょうか。うちのいいところは、大スポンサーがないところ。社長が代わって、俺サッカー嫌いなんだよね、の一言で撤退するというところではないところでしょう。自治体も、政治家は分かりませんが、少なくとも仙台市の役人は、ベガルタの経済活動だけでない部分も見ている。イメージ・プライドの問題、シティーセールスとして、市のパンフレットの中にベガルタが入られる、ということを好意的に見てくれているとは思いますが。現実には2部に落ちた時に、スポンサーが3社くらいしかありませんが、どうなるか、どんどん撤退されると福岡みたいになるのかなあ、という心配はしてますね。

企業だと理念があって、理念にかなわない会社は、バタバタとつぶれていっている傾向にあります。ベガルタの場合、後援会の場合も同じで、ミッション、大目的を持たないと駄目だろうと思います。Jリーグの100年構想との絡みで言うと、総合型地域スポーツクラブがあります。その地域で、スポーツは「見る」「する」「支える」「交わる」が実行できるようなクラブを作るべきだ。ベガルタというチームも、総合型クラブの核となっていくのが理想です。例えば山形は、モンテディオの他に駅伝のチームも持っていますね。新潟はアルビレックスというサッカーとバスケットのチームを持っている。フロントはチームをいくつか抱えている状態で、それぞれ試合を「見」に来たり、運営を手伝う「支える」人がいる、全体の中の「交わり」があって、これをクラブと呼ぶ。学校や企業スポーツで、メダルを何個取るかだけが至上命題になっていたスポーツが、Jリーグが出来たお陰で、我々も知らなかったけど、実はサッカーを題材にしてすごいことをやってるんだなあ、ということがわかった。3年後くらいを目安に、どんなことをやるのかをまとめる時期に来ている。2万人は達成できたので、ベガルタの理解を深めてもらうような企画、現実には赤字をどうしていくかという議論をしていきたい。後援会では太白支部と 県北支部があるが、宮城県で仙台市の中でだけごちゃごちゃしていてもしょうがないので、支部が出来ていくと、密度の濃い人間関係の中で組織が出来て、それぞれの地域の中で独自の活動をしていってもらう中で、支部が情報のアンカーマンの役割をする、ということがあるんです。すると一旦ことがあった時、J2に落ちました、経営不振に陥りました、つぶれそうです、となった時に宮城県各地から「つぶすな」「つぶすな」「つぶすな」という声が上がってくる(笑)。スタジアムで応援している立場だけでつぶすなといっても、お前らの勝手だと言われるが、試合に行っていないけど、テレビでしか見ないけど、ベガルタは宮城県の財産なんだ、誇りなんだ、つぶさないでくださいという人たちが何人も出てくると力になる、ということ支部の人は分かって欲しいと思います。

サポーターとは？

実際は良く分からない。ブランメル時代は100ある、と言われていた。その後ユニットといって、勝手にくっ

ついたりして、自分で名前をつけてやっていると言う感じになってきた。仙台のサポが賢いなあと思うのは、分裂をしないように気を遣っているところ。グループを作り始めるということが、分裂の始まりというような頭があるから、グループ名もつけないし、代表者も立てない。誰が代表になる、とって絶対もめるでしょ。だから、グループが出来てくることは悪くない、駄目だとも言わない。全体として、なんとなくそこに来た人間で応援をやる、という感じ。以前ゴール裏で応援するグループでワッペンを作ったが、ワッペンつけてない人はサポーターじゃないのか、という人が出てきて、止めようということになり、自然消滅していった。今応援しているところにいる人たちを勝手にコアサポと呼んでいるだけで、スタジアムの中でのコールリーダーはいますが、他の場面でも仕切っているわけではなく、その時、彼がいたらやる、というそれだけのことで、そこはお互い認識しているようです。よくマスコミなどでも、後援会はサポーターですか、と聞かれますが、サポーターもいるし、そうでない人もいる。90分はそれぞれの持ち場で応援している。ホームページの中にも、誤解を受けないようあらかじめ、サポーターグループではない、と書いておいた。ただ、詭弁だといわれるところもあって、浦和だと人文字は完全にサポーターの企画なので、あれはサポーターのやってることじゃないか、と言われれば苦しい。後援会も大きな意味ではサポーターなんだと思います。仙台は貪欲な部分があって、スタジアムの盛り上がっている部分だけをコアサポーターがやって、それ以外のことについては、基本的に口を出さない。コアなサポーターとフロントとの話し合いがあったが、その接着剤で後援会が入っているんです。両者の接点が見出せない時にこんな感じで話をしてみたら、と投げかける、そんな風に住み分けが出来てきたと言えるのではないかと思います。ある人がおもしろいことを言っていて、「後援会って、なくてもいい団体ですよ」その通りだと思います。ボランティアの皆さんがいなければ試合にならないし、サポーターがいなければ盛り上がりには欠ける。カントリーロードとかマッチデーはチームが発行すればいい。よく他のチームの人に不思議がられるんですが、なんで後援会が作ってるんですか、そんなのフロントがつくるものでしょう、とよく言われるんです。ただ、掛け捨て保険のようなもの、なんかの時にはすごい力を発揮するような気がしています。クラブがやりたいんだけどやれないことをやる、というようなことです。手を引いてくれといわれたら、喜んで手を引きますよ。みんな大変な思いしてやってるんですから。

会員は?2万人入るのに、どうしてこの数なのか。

9000名、アンケートでは、後援会が何やってるかわからない、という回答が多かった。やることだけで精一杯で、プランとかドウはできてるんだけど、その後のチェック・アクションが悪い。そのため半分の人が二の足を踏んでいる、ということだと思います。多分残り1万人のうちのいくらかは、コアなサポーターで、後援会なんか入ってられるか、という斜に構えた人がいるんじゃないか、と思います。カウンターにいてよく言われるのは、後援会にはいって何かいいことあるの、特典はあるの?ということ。何かしてもらえる後援会ではなくて、自分の関心のあるところで、チームを支える活動を企画を持ち込んで実現していく、ということが出来るかもしれない、後援会を一つの装置として使っていただければ、ということの理解がされていないのではということだと思います。

サッカーそのものを楽しみたい人も結構いますからね。

全国ホームタウンサミットについて、9/20、21、仙台市内で開催されます。これまで、平塚市・長岡市・磐田市・さいたま市(浦和)と4回続いて、仙台が5回目となります。地名を見れば、Jリーグのある地域だということがわかります。主催団体は、青年会議所であったり、こういう後援会であったり、いろいろですが、参加してくるのは、J1J2のフロント・ボランティア・自治体・青年会議所・商工会議所も入ってくる。ホームタウンと言う切り口で、学校の芝生化だとか言う理念のところからボンボン出てくるような会になります。団体の代表が出てくるので、そんなに大勢で来ると言うことはないと思います。主催は後援会ですが、是非WNにも実行委員会に入って欲しいと思っています。県サッカー協会・ホームタウン協議会にも声がけして運営していきたいと思っていますので、その時期になりましたら、お願い事や情報提供をさせていただきたいと思っています。1st ステージ中断の6月頃から、と思っています、というのは、あんまり早くからやっても動きが取れないものだと思います。(文責・小野枝美子)

